

磐梯山ジオパーク 現地再審査報告書(公開版)

【日程】 2015年11月24日～11月25日

【審査員】

中田 節也（日本ジオパーク副委員長、東京大学地震研究所教授火山会）
阿部 宗広（日本ジオパーク委員、一般財団法人自然公園専務理事）
松原 典孝（山陰海岸ジオパーク推進協議会学識専門員）

【主な参加者（所属）】

竹谷 陽二郎（磐梯山ジオパーク協議会運営委員長、福島県立博物館専門員）・高梨 光一（磐梯山ジオパーク協議会 運営委員）・小椋 正任（磐梯山ジオパーク協議会 事務局長、北塩原村商工観光課長）・須藤 裕三（北塩原村 商工観光課 班長）・野矢 実（猪苗代町 商工観光課長）・野崎 和彦（猪苗代町 商工観光課 主査）・大竹 米子（磐梯町 商工観光課長）・鈴木 孝之（磐梯町 商工観光課 副主幹）・加藤 靖宏（福島県 企画調整部 企画調整課 主幹）・中村 敬（福島県 企画調整部 企画調整課 主任主査）・阿部 裕（福島県 企画調整部 企画調整課 主事）・阿部 裕（福島県 企画調整部 企画調整課 主事）・渡邊 憲夫（福島県 会津地方振興局 主査）・蓮岡 真（磐梯山ジオパーク協議会 ジオパーク専門員）・卯月 幸一（磐梯やま楽校 副会長）・五十嵐 牧子（いなわしろ伝保人会 代表）・吉田 長政（磐梯町商工会 会長）・伊藤 延廣（裏磐梯エコツーリズム協会 理事）・田中 純（猪苗代町立吾妻小学校 教頭）・渡部 恵志（北塩原村立裏磐梯中学校 校長）・齋藤 公弥（国立磐梯青少年交流の家 企画指導専門職）・池田 睦宏（ナチュラルビズ 代表）・二神 紀彦（環境省 裏磐梯自然保護官事務所 自然保護官）・上田 拓（ナチュラルビズ）・田島 裕子（いなわしろ伝保人会）・田島 一博（いなわしろ伝保人会 副代表）・一般住民：・高橋 二三雄・野村 則子・佐藤 トモ子・赤羽 カヨ子・黒澤 孝・渡部 喜昭・大塚 セイ子・高埜 直文・酒井 美代子・吉田 徳昭・佐藤 英一・岡田 憲治
・磐梯山ジオパーク協議会事務局員：・戸野部 彰・向井 智則

【見学地点】

道の駅ばんだい（ジオストーリーと道の駅の活用）、磐梯町岩なだれ堆積物露頭（ジオサイト）、磐越西線磐梯町駅－翁島駅（ながれ山と鉄道）、猪苗代リゾートスキー場および天鏡台（猪苗代湖の誕生）、1888年噴火の痕跡「殉難之精霊碑」と「見弥の大石」（ジオサイト）、農家レストラン「結」（地域住民による第6次産業化とジオサイトの活用）

現地審査のまとめ

1) ジオサイトと保全

ジオサイトは、磐梯山の火山活動や磐梯山信仰を理解することができるサイトが複数用意されており、その多くは看板設置やガイドの存在などによりアクセスしやすくなっている。基本的に磐梯山を中心としたジオストーリー中での位置づけがなされておりわかりやすいが、人との関係については、もう少しわかりやすく工夫する必要がある。山体崩壊からの立ち直りや、過去の人と磐梯山のかかわり、暮らしや農業との関係などをより分かりやすくリンクさせることで、ジオパークに厚みを出してほしい。

保全の面では、国立公園内のサイトについては、国立公園と連携し、現場をよく知るガイドが参画する形で実施されており評価できる。その方法についても「視点場」の概念を取り入れるなどオリジナルの工夫を盛り込んでおり良い。一方で、国立公園外のサイトについて、法令等の規制による保全が難しいものについては、土地所有者との協定・覚書等実効ある保全策を早急に検討すべきである。

2) 教育・研究活動

教育については、防災を中心に地元小中学校で積極的に取り組まれており、ジオパーク協議会や地元博物館の協力体制もとれている。その内容は充実しており、さらなる成果が期待される。今後、ジオパーク教育を積極的に推進している学校等が基幹となり、エリア内でさらに活動を広めるとともに、ジオパークネットワークの中でもそのノウハウを共有するよう努めてほしい。住民向けには、ガイドの学習会や公民館のセミナー等により普及が図られており、火山砂防フォーラムなども実施されている。ガイドや住民の中には、ジオパークになって初めて分かったことがあると話す者も多くおり、ジオパークの効果が出ていると考えられる。

研究については、各研究機関等が実施する活動に積極的に関与するなど、情報の収集に努めており、研究の成果をジオストーリーや解説看板等に反映するなど、市民や現場へのフィードバックもできている。今後、現場で活躍するガイドに最新の学術情報が素早く反映されるとともに、ガイドや地域住民が抱く疑問に即座に対応できるような、学術関係者とのネットワークを構築し、質の向上に励んでほしい。

3) 管理組織・運営体制

専門員を専属にするなど、運営体制の強化を図ってきている。各専門部会を設け、それらが積極的に機能することにより、保全や普及などについて活動が充実し始めている。国立公園との連携やガイドの運営への積極参加も評価できる。一方で、事務局体制については、拠点の明確化とスタッフの強化が求められる。現在、事務局のスタッフは常駐1名臨時2名の3名体制だが、ジオパーク活動を推進する上では不十分である。構成3町村から専任スタッフが出向するなどの人材強化と、本ジオパークへ入り口となる施設への事務局移転等が求められる。

4) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム

各所に、それぞれの得意分野を有するレベルの高いガイドが配置され、逐次対応可能な体制がとられるなど、ガイド体制は充実している。ガイドの内容も、一般的な観光ツアー的なものから地域資源を活用したアクティビティまで幅広く用意されており、参加者の満足度も高い。今後も継続してガイドの質の向上とジオパーク協議会との連携強化を図ってほしい。一方で、ガイドのネットワークについては、ガイド組織が複数あってそれがジオパークの下に連携できていないという印象がある。訪問者に何を学んで欲しいかという意識の共有や事務局が品質保証できるガイドの認定制度など、ジオガイドのネットワーク作りを行うことが望ましい。

ジオストーリーについては、5つのジオストーリーとその背景となる4つのサブテーマを設け、さらに、地域の特徴を理解するための8つの質問をうまく連携させながら展開するなど、工夫されており前回の審査時よりわかりやすくなっている。それをパンフレット等に示すだけでなくジオガイドが理解し、各ジオサイトでの的確に解説している。全体のストーリーの中心にあるのが磐梯山であり、それと動植物や人々の暮らしの関連性がうまく示されている。

一方で、人々との関係については、まだその具体的内容が分かりづらく、もっと充実させてほしい。山体崩壊による荒廃からの回復過程や過去における人々と磐梯山のかかわり、暮

らしや農業との関連など、もっとわかりやすく示すことができれば、ジオパークに厚みが出る。

地域住民の参加については、ジオグルメの開発や住民団体による地域資源を活用した第6次産業化の動きがあるが、地域の取り組みがジオパークを土台として一体感があるまでにはまだ至っていない。そのためには、地域住民にジオパークの面白さや利点などを含んでその理念をより広く浸透させ、自然な形でジオパーク活動への参画を促すような機会をもっと設けるなどの工夫をする必要がある。

5) 国際対応

英語が併記された解説板や、英語のジオサイトパンフレットなど、一部で外国語対応がなされている。今後、さらに野外解説板、パンフレット、ガイドなどにおいて外国語対応が望まれる。アジアからの訪問者への対応も考える必要がある。

6) 防災・安全

防災については、学校教育等にも積極的に取り入れられ、住民にも広く浸透しつつある。ジオパークになって初めて、ながれ山の構造などを知ったというガイドがいるように、ジオパーク活動が地域の防災に還元されつつある。ガイドの防災・安全管理意識も高く、解説内容に反映しているほか、安全管理については強く意識し、現場で実践している。今後も地域住民を対象とした防災教育を推進するほか、そのノウハウをエリア外にも広く発信するように努力してほしい。また、ガイドの安全管理については、ガイド同士のネットワークを構築するなどして、質の向上に努めていただきたい。

7) 結論

日本ジオパーク認定審査（2011年）での指摘事項については、今後、取り組みをさらに強めるべき分野はあるものの、以下の点で改善と発展が認められた。ジオストーリーの明確化、専門員の雇用による運営強化、高いレベルのガイド活動や各種アクティビティの展開、国立公園やガイドとうまく連携して作成した保全計画、団体や民間の活動、解説板の増築、ホームページの改訂、各種パンフレットや解説ブックの充実、などである。特に、豊富な地域資源を活用した高いレベルでのガイド活動とその提供、国立公園と連携しガイドが積極的に参加する保全活動は本ジオパークの強みである。現在の活動をベースに、事務局の運営体制やガイドネットワークなどの強化を図ることによって、さらなる発展が期待される。

以上のように、磐梯山ジオパークを日本ジオパークに再認定するものとする。